

第44回 記者懇談会実施概要

- 1 日 時 平成19年10月3日(水) 15時～
- 2 場 所 100周年記念会館 第2会議室
- 3 内 容

(1) 研究発表・質疑応答(15:00～16:00)

- ・^{たにもとなほ}谷本奈穂 総合情報学部准教授

発表テーマ「美容整形を考える」[資料1](#)

- ・^{おおぼら やすし}大洞康嗣 化学生命工学部准教授

発表テーマ「有機分子認識能を有するナノカプセル金属化合物
ー触媒反応への利用を目指してー」[資料2](#)

(2) 学内状況説明・情報交換(16:00～16:30)

- ① 吉本興業株式会社による寄附講座の開講について[資料3](#)
- ② 平成19年度文部科学省GP等教育改革支援プログラム採択状況について [資料4](#)
- ③ 名誉博士号贈呈および文部科学省グローバルCOEプログラム第1回国際シンポジウムの開催について[資料5](#)
- ④ 客員教授の委嘱について[資料6](#)
- ⑤ 日本初の「カレッジリンク型シニア住宅」第2回クラブ・アンクラージュフォーラムの開催について[資料7](#)
- ⑥ 大学評価フォーラムの開催について[資料8](#)
- ⑦ 社会学部創立40周年記念 フェスティバル「S o c i o l o g y N e x t 4 0」の開催について[資料9](#)
- ⑧ 平成19年度文化庁芸術拠点形成事業「北大阪ミュージアム・ネットワーク」の実施について[資料10](#)
- ⑨ 河田悌一学長の財団法人大学基準協会基準委員会委員長就任(再任)について
- ⑩ 関大生の活躍について[資料11](#)

4 大学側出席者

河田悌一学長、芝井敬司副学長、良永康平学長補佐、川原哲夫学長課長
谷本奈穂総合情報学部准教授、大洞康嗣化学生命工学部准教授
木村洋二社会学部教授、株式会社よしもと梶本登氏、稲田一豊教務センター次長
北田伸治総合企画室長、藤本清高広報課長 他

5 参考資料

- (1) 「起業のススメ」セミナーチラシ
- (2) 大武健一郎客員教授講演会チラシ
- (3) 関西大学・近畿経済産業局「連携講座」チラシ
- (4) 「関西大学公開講座(高槻市)後期講座」チラシ
- (5) 経済・政治研究所第175回産業セミナー
- (6) 関西大学・大阪府立大学「学学連携による連続技術講座」チラシ
- (7) 「関西大学おおさか文化セミナー(後期講座)」チラシ

- (8) 「社会人のための関西大学サタデー・カレッジ」 チラシ
- (9) 東京センター「第7回技術交流セミナー」 チラシ
- (10) 東京センター「ソシオネットワーク戦略公開講座」ポスター
- (11) アジア文化交流センター交流研究センター「第4回国際シンポジウム」および「第2回世界漢語教育史研究学会大会」 チラシ
- (12) 人権問題研究室「第51回公開講座」 チラシ
- (13) なにわ・大阪文化遺産学研究センター国際シンポジウム「新発見『豊臣期大坂図屏風』の魅力ーオーストリア・グラーツの古城と日本ー」 当日配布資料

以 上

美容整形を考える

総合情報学部准教授 谷本奈穂

【概要】

「身体髪膚これを父母に受く、敢えて毀傷せざるは孝のはじめなり」。これまで美容整形はタブーであった。というのも、第1に医学に健康な体を改造することへのタブーがあること、第2に外科の手術が18世紀の終わりまで簡単な技術しかなかったこと、第3に麻酔が19世紀後半になるまで普及しなかったからである。

ところが現代では、美容整形はかなり普及してきている。雑誌やテレビで美容整形を紹介する記事や番組が増加した。メスを使わない手術を「プチ整形」と名付け気軽にできるものとして喧伝され人気を博している。実際に、私が行った2005年のアンケートでは「整形したい人」が45.2%（男性24.5%、女性63.1%）にのぼっている。

しかし、美容整形をめぐる事情は、ほとんど明らかになっていない。そこで報告者は、実際に整形にかかわる人々へのアンケートとインタビューを行っている。本報告では、現在の整形について考えていきたい。

【プロフィール】

大阪府出身。大阪大学人間科学部卒業、同大学院博士後期課程修了。博士（人間科学）。専門は文化社会論。研究対象は、雑誌の恋愛記事や少年マンガ、化粧品広告、フィットネスクラブなどに及ぶ。今年度中に、恋愛論の単著を出版予定。

趣味は、映画鑑賞、推理小説を読むこと、友達と食べ歩きをすること、（ちょっとだけ）ピアノを弾くこと、スキー。

有機分子認識能を有するナノカプセル金属化合物 ー触媒反応への利用を目指してー

化学生命工学部准教授 大洞康嗣

【概要】

プラスチック、医薬品、農薬等、現代社会においては化学物質の存在は必要不可欠であり、これらの物質のほとんどが石油、石炭等の化石燃料の精製分離によって得られる化合物を出発原料として人工的に生産されている。しかしながら、これらの物質の大量製造過程においては、環境汚染や地球温暖化問題等の深刻な問題が生じている。これらの問題を解決するために、近年「グリーンケミストリー」と呼ばれる、副生成物を出さない低環境負荷型物質製造プロセスが推進されている。このグリーンケミストリー物質製造プロセスにおいては触媒の果たす役割は非常に大きく、高性能な触媒の開発は効率的な資源・エネルギーの利用ならびに地球環境保全に多大な貢献が見込まれる。さらに、不斉触媒反応（野依、シャープレス、ノールズ）やメタセシス反応（ショバン、グラブス、シュロック）に代表される、近年の革新的な発想に基づく触媒の開発研究は、それぞれ2001年、2005年のノーベル化学賞対象研究であり最先端の学術領域としても注目されている。

我々は、反応物質の分子サイズ選択（分子ふるい）能を触媒配位場に付与するという従来にはない機能を持たせた新規ナノカプセル金属触媒化合物の設計ならびに合成を行った。このようなナノサイズ制御された触媒を有機合成反応に用いることによって、「特定の分子サイズを有する化学物質だけ」を化石燃料等からの精製分離を行っていない「未精製原料混合物」から「高選択的」に得られるという画期的な低環境負荷型精密合成法の道が拓かれるものと考えている。

【プロフィール】

1969年静岡県生まれ。関西大学化学生命工学部准教授。専門分野は有機金属化学、分子触媒化学、有機合成化学。95年岐阜大学大学院工学研究科物質工学専攻修了（博士（工学））

95年米国ノースウエスタン大学博士研究員、97年通商産業省物質工学工業技術研究所（現：経済産業省産業技術総合研究所）研究員、99年北海道大学触媒化学研究センター助手、06年関西大学工学部助教授を経て07年より現職。05年日本化学会北海道支部研究奨励賞受賞。